



歴史を振り返って 思うこと

絵はがきが語る北の大都市

先日、中尾仁彦さんの「箱館歴史散歩の会」で話をさせていただきました。「新旧の写真で楽しむ、函館歴史散歩」という演題で、戦前の写真絵はがきに見られる西部地区の町並みと、今の町並みを見比べながら、函館の歩みを紹介しました。

戦前は「北の大都市」と呼ばれ、大正9（1920）年の第1回国勢調査では全国9位、札幌や仙台を上回る約14・6万の人口を擁した函館。



昭和9年大火による丸井デパートの惨状と、翌年開催された第1回「港まつり」の賑わいがき語る北の大都市

頭ではわかっているつもりでしたが、投影する画像を準備しながら、改めて往時の堂々たる町並みに感慨を新たにしました。

古い絵はがきには、函館を何度も襲った大火を記録したものも少なくありません。惨状は目を覆うばかりですが、すごいところは、そのしばらく後に発行された絵はがきには、見事に復興された町の姿が写っているということとです。いかに町に活力があつたかを物語っています。

函館市地域交流まちづくりセンターの前身である丸井今井呉服店函館支店（通称・丸井デパート）も、耐火建築でありながら、昭和9（1934）年の大火では、内部に火が回るなどして無残に焼けただれましたが、昭和10年の絵はがきでは、被害などなかつたかのように甦り、店の前が「港まつり」のパレードで埋まる様子が見られます。

なお今も続く「港まつり」は、大火からの立ち直りと発展を願って、このときに始まったものです。

防火線として再生された銀座通り

戦前の面影をとどめる区域として銀座通りの写真もお見せしました。銀座通りもまた、大火からの復興力

を物語る生き証人です。

明治20年代のはじめ、高田屋の掘割を埋め立てて誕生した銀座通りは、今のデパートの走りととも言える勤工場が設けられるなど、早くから繁華街として栄えてきましたが、大正10年の大火で灰燼と化します。

しかし被災後すぐに有志が立ち上がり、この通りを火災の広がりを食い止める防火線にしようという計画を立案します。そして今もその一部が残る不燃質建築のビル街に生まれ変わったのです。

不燃質建築はレンガ造り15棟、コンクリートブロック造り19棟、鉄筋コンクリート造り24棟を数えました。コンクリートは非常に高価で、全国的にもまだコンクリート建築は珍しかった時代でした。

函館人の先見の明に思う

日本の近代建築が、レンガ造りから鉄筋コンクリート造りへと移行するのは、大正12年9月1日の関東大震災でレンガ建築がごとく倒壊したことによるものですが、函館ではそれよりも先に、地元の創意によって鉄筋コンクリート化が進められていたのです。日本初の鉄筋コンクリート寺院として知られる東本願

寺函館別院も大正4年に完成しています。まさか当時の函館人に関東大震災が予測できたはずありませんが、その先見の明には驚くばかりです。

古写真を頼りに昔の函館に思いをめぐらせることは移住者の私にとっても楽しいことですが、このような先人の叡智に気づかされると、ますます函館という町に目置いていきます。

今も函館では町の活性化のための取り組みが進められていますが、遠い将来、私たちの子孫がそれを歴史として振り返ったとき、どのように感じるでしょうか。

他の町の成功例に学ぶことを否定するわけではありませんが、やはり、よそにはない独自の知恵や発想が感じられてこそ、町の歴史が輝いて見えるのではないかと思います。

★プロフィール★

おおにし	つよし
大西	剛さん

大阪出身。
2011年秋より、函館に移住。
「新函館ライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。
2012年には、2008年秋からの函館通いで感じた町の魅力を綴った「新函館写真紀行」を出版。
現在は、移住サポーターとしても活躍している。